

特集 「異分野」理解のすすめ
ビッグバンを国際会計から考える

井戸 一元

日本版ビッグバン(金融制度の大改革)が唱えられて久しい。

本講義では、ビッグバンとの脈絡の上で、国際標準(グローバル・スタンダード)であるところのデ・ファクト・スタンダード(事実上の標準)、「国際会計基準(International Accounting Standards: IAS)」の観点から、わが国の企業会計制度の変更とその結果発生するであろう一般産業を巻き込んだの企業経営・評価への広範かつ深刻な影響に検討を加えた。

会計ビッグバンとは何か、国際会計基準とは何か、その衝撃波は特に日本にどのような影響を及ぼすことになるのか、その結果として企業の経営・評価も変化するのであるのか、変わるとすればどのように変わるのか。

いずれにしても、ビッグバンは始まったばかりである。「変革」は千載一遇の「好機」であるのか、避けるべき「危機」であるのか。日本の個人資産1200兆円のゆくえを含め、確立した制度は安らかな權益を産み、多くの保守主義者から支持され続けるものとは、到底考えられない。

国際会計は、世界の国々の所得の再分配を考える制度的枠組を提供する研究領域である。いまや先進諸国を中心として各国会計基準は、会計基準の国際的調和化、IASへの統一化(IAS国内化)の段階に入っている。

1. 国際会計基準の成立と衝撃

- (1) 制度変更を通じての企業への圧力
- (2) 止められない趨勢と日本の対応の遅れ
- (3) 国際会計基準の改正作業(コア・スタンダードにみる変化)
- (4) 財務諸表における変貌の主役(連結会計、資産の時価評価、年金会計)

2. 個別財務諸表から連結財務諸表へ

- (1) 連結時代に向かう日本(連結財務諸表の理想と現実)
- (2) 連結財務諸表の特徴(分析・評価の要注意点)
- (3) キャッシュフロー計算書の採用(原点へ戻る?)
- (4) 連結情報の実例(日本企業にみる連単比較)
- (5) 変わる経営者責任(求められる国際的視点)

3. 時価評価と年金で企業はどのように変わる？

- (1) 原価主義から時価主義へ(会計情報としての時価)
- (2) 時価主義の範囲と算定方式(理論的緻密さと実行可能性)
- (3) 時価主義で変わる日本企業の財務諸表(変わる「含み益」の意義)
- (4) 年金会計導入の意味(恐るべし米国会計基準の例, わが国個人資産のゆくえ)
- (5) 国際会計基準のねらいとその限界(国際会計基準の新たなる問題点)

4. 変わる日本企業の分析・評価

- (1) 国際会計基準の適用と財務諸表比率の変化(ROEなどの経営指標の日米比較)
- (2) 国際化が進む企業評価(為替レートの変動)
- (3) 財務比率と株価(ROEからEVA, MVAへ)
- (4) 会計と分析の接点(複雑化するEPS計算)
- (5) キャッシュフローと分析手法(安全性と企業価値)

5. 企業経営の未来(経営者, 従業員の意識変化)

- (1) 日本型経営システムの疲労(困難になる含み資産経営)
- (2) 厳しさ増す経営責任「コーポレート・ガバナンス」の追及
- (3) 監査役, 公認会計士の機能強化(監査能力の向上と信頼)
- (4) 経営者予備軍としての従業員の対応(進展する専門化と企業選択)
- (5) 真の国際企業をめざして(国際的評価に耐えられる企業への飛躍)